

<平成9年度海外研修報告>

## フランスのエコミュゼ調査報告

—ルードルとクルーズ・モンソー—

黒川 威人

### 1.はじめに

エコミュゼは英語ではエコミュージアムであり、近年日本でもこの呼称によるミュージアム（以下フランスにおける事例はエコミュゼを使用）が生まれつつある。フランスが先駆と見られるが、国際的な場での認知は1971年に開かれた第9回国際博物館会議で提唱され、時の環境大臣ロベール・ブジャットによって採択されたものである。しかしそれ以前からエコミュージアムの概念は博物館学者アンリ・リビエールによって発想されており、一部の地方自然公園では展開されていたようである。

私は1995年3月に既にフランスの著名なエコミュゼであるバス・セヌとアルザスの2カ所と、まだ正式のエコミュゼとは認定されていなかったものの活発な活動を展開していた自然公園のカマルグおよび最近活動を始めたばかりのラ・クロウの計4ヶ所を視察・調査している。

ここでは前回調査地での成果を踏まえながら、表記2ヶ所のエコミュゼに関して調査報告を行う。

なお、調査日程は1997年6月22日（日）成田空港出発で同月30日（月）に同空港へ帰着。実質1週間の調査行であった。

### 2.調査記録

2-1 ルードル・エコミュゼ (Écomusée du pays de la roudoule)

#### (1) テリトリーの概要

地中海に面したリゾート都市ニースからヴァール川沿いに北西へ65キロメートル、ピュジェ・テニエという町があるが、ここから枝別れるルードル川に沿って北へ遡る流域一帯の6つの小集落と、ヴァール本流のさらに上流のアントルヴォという町

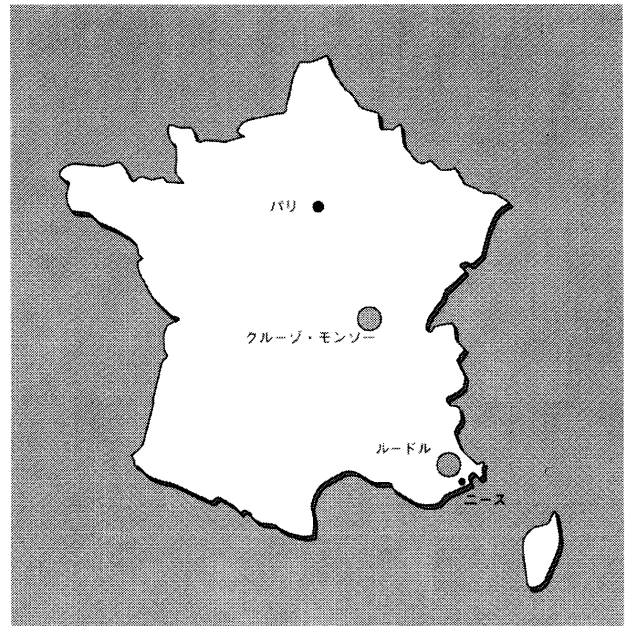


図1 フランスにおける調査地

(行政区域では隣の県になる)を加えた一帯がルードル・エコミュゼのテリトリーである。

このミュゼの前身は「ルードルの友」というアソシエーション<sup>#1</sup>であり、1966年に出来た。その後1986年に「エコミュゼ・ド・ベイ・ド・ラ・ルードル」(本稿ではルードル・エコミュゼと略記)が設立された。

同エコミュゼのパンフレットによれば、専門家、教育者、科学者と協力し、住民と議員のイニシアチブで行ったものであり、その目的は、「地域の中で新機軸の魅力の極点をつくるために、あらゆる環境にかかわる山国 (haut pays) の未来の文化的、経済的生活を構成する諸活動を作っていく研究センターであり、実験場であり、装置となる」とあって、単なる文化的所産のミュージアムではないことがわかる。以下調査メモにしたがって紹介する。

## (2) 各調査地の記録

### ●ピュジェ・ロスタン (Puget-Rostang)

人口は100人余り、エコミュゼのコア施設のある集落である。午前10時、モラン村長と職員のみケリス氏の車に分乗して宿舎を出発。

・最初に砂防実験の現場を視察する。(図3)

現在3つの異なる方法で実験中である。自然石の石垣とならんで、形も色も異なるブロックの擁壁が積まれていた。これはギリシャ、イタリア、スペイン、フランスなど地中海沿岸の5カ国による共同プロジェクトなのだという。実験場所はピュジェ・ロスタン村からやや上部の傾斜地で、コミューンの土地だが99年間エコミュゼに貸与されている。工事はボランティアで「～の日」というのを設けて行っている。

・さらに上ると羊飼いの小さな集落が見える。ここはもと峠越えの宿場であって馬を5頭まで泊めることができた。モラン村長によれば、今でいえば車5台同時に給油のできるガソリンスタンドといったところだ。交通路が変わり200年くらい取り残された村である。

・地図には載っていない道だが、10年ほど前に観光用に開かれたという山道をトラバースして、ローマ時代からの村ラ・クロア (La Croix) へ向かう。険しい山道であり普通の車はこわくて通れない。

### ●ラ・クロア (La Croix) (図4)

クロアの町の入り口にはランドマークとして十字架があるが、語源は道路の交差するところから来ているらしい。「私の好きな美しい村」というフランスの全国コンクールに第3位に入選したことがあり、それを記念して建物の壁にエンブレムが取り付けられている。その広場に面してエコミュゼ設立を記念してルイ・ブレア (1450-1523) の展覧会を催した教会がある。(こことピュジェ・ロスタン、サン・レジェールの3カ所で3度にわたり開かれた。)ローマ時代の砦の跡があちこちに残っており11～12世紀のこじんまりとした教会がある。

この村だけの人口は22～3人だがコミューン<sup>註2</sup>としては120～30人になる。最近住み始めた新しい住

人が3つの村で4カップルいる。いずれも学校の教師である。

### ●鉱山の家 (Maison de la Mine)

メゾン・ド・ラ・ミーヌという鉱山の博物館へ行く。今年に入ってから開館された新しい施設だ。エコミュゼの施設ではないが、テリトリーの中にあり見学コースの一つに位置付けられている。その意味で相互に助けあっているといえる。

モレー館長の説明を受ける。直接鉱山で働いていた人ではなく、あまり専門的ではないが、熱心に説明してくれた。銅鉱山の歴史資料とともに収集された銅製品と鉱物資料が展示してあり、鉱山の操業時の模様がファンタスティックに表現された映像が上映される。隣接して宿泊研修施設が建っていた。

この鉱山は1860～1886の間開山し、一時はフランスの銅の7割を生産していたというが、今も5キロメートルの坑道が遺っている。第2次大戦後はウランも採掘していた。

隣接の建物は自炊施設があり、2段ベッドの6人用の部屋が6室で、36人が一度に収容可能だが、完成したばかりでまだオープン前とのことであった。

このミュゼ自体今年の5月に開館したばかりですべてが新しい。

### ●アントルヴォ (Entrevaux)

午後4時頃町にはいる。ここは行政的には隣の県でありオート・プロバンスである。川をまたいでアーチ橋があり、アーチの上を水道が走っている。水道橋であるが、この水は対岸の粉挽き工場とオリブ油絞り工場の用水・動力源として使われる。

・粉挽き工場

1カ月だけ臨時で雇われたという観光協会の若い女性が説明をおこなっている。

15世紀の古い石臼があり、今も使われている。麦はすべて洗って、濡れたものをベルトコンベアですくい上げホッパーから落とす。小さな麦はそのまま落ち、家畜の餌となり、大きな粒だけが粉挽きに回される (一部は種籾)。なぜ濡れたまま粉挽きに回すのか。それは大きな固い石 (シレックス: 火打ち石) 製の臼のためで、すり潰されるあいだに熱を発



図2 ルードルエコミュゼのコア施設



図4 ラ・クロア村



図3 砂防実験現場



図5 アントルヴォの古城

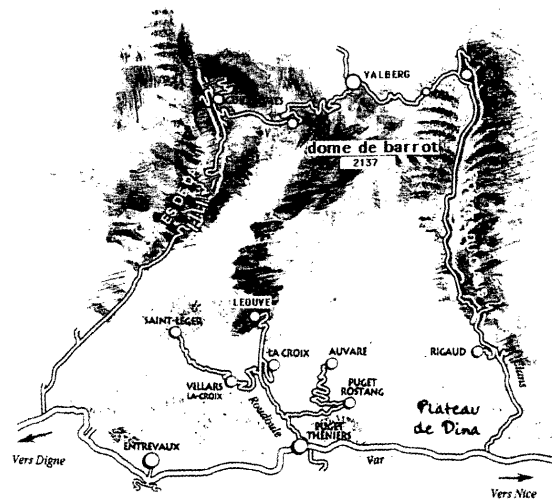


図6 ルードルエコミュゼのテリトリー

するので、乾いた麦では燃えてしまうのだ。

### ●オリーブ油絞り工場 (図8)

15世紀のオリーブオイル挽き用の臼がある。この臼は石だが以前は木の臼も使っていた。モラン氏も子供のころ挽いてもらったが、同様の臼は村に幾つか必ずあった。11月から1月にかけて実を手で採集する。揺らすのは木によくないので棒などで叩き落としエプロンなどに受ける。女子供も手伝った。この臼では120キログラムを一度に臼にいれ1.5トンの石の車輪ですりつぶす。男たちはワインを飲みながら2時間ほどかけて挽いた。木製のへらを使い、オリーブをかき寄せながら挽くが、これにはコツを要する。適温があり、薪ストーブを焚きながら25～30度の室温の中で行う。

挽いたあとペースト状になったものを藁製のアンギン(編布)風の籠に入れ、たたき潰す装置に入れてさらにつぶす。最後はこの籠を4つずつ重ね、絞り機で絞るが、古い絞り機は長い手動棒を圧搾機に取り付け4人で回した。ヴァージンオイルのあとは熱湯をかけて絞る。オイルは比重が軽いので、分離は簡単である。貧しい人はさらに熱湯をかけ絞った。今もこれはダイエット用に使われている。最後の水っぽい油は教会の灯油として使われた。

絞るかすは豚など家畜の餌となる。また、乾かしたものは粉にしてパンを作るときの分離用に使われ、これは今も使われている。あるいは、燃やして煙を出し蜂の巣退治にも使った。

現在もこの工場は、地域の人々が自家消費用のオリーブ油を絞るために使われている。

### ●橋を渡って城壁の中の町を視察する。

昔の町並みのほかカテドラルや法皇庁の塔がある。昔の町並みは補助金が少なく保存に苦慮している。空き家も多く「売家」のはり紙の家もあった。

城塞は国の文化財であり補助金は国が50%、オートプロヴァンス県が25%、コミューンが25%負担している。

城壁のなかには175人がすんでいる。町全体では7百数十人という人口である。

城門には星の下に山がある紋章がつけられている

が、その下の文字は「起こったことは話し合っ(解決して)行こう」という意味がプロヴァンス語でかかっている。城塞はエコミュージアムには入っていない。しかし「～の日」や祭りの日にはエコミュージアムの会員も参加して盛り上げたり、観光キャンペーンなどでも相互に協力している。

## 2-2.クルーゾ・モンソー・エコミュゼ

(Écomusée de la communauté le creusot montceau)

### (1) テリトリーの概要

ブルゴーニュ地方の東南に位置しクルーゾ (Le Creusot)、モンソー・レ・ミーヌ(略してモンソー)(Montceau-le-mines)という2つの町からなる都市共同体がテリトリーである。(図11)

モンソー近くのブランズィーという町で1769～1992年、石炭を産出していたことから、18世紀に運河が開かれ、一帯は鉄の精練や加工の一大工業地帯となった歴史がある。クルーゾ・モンソーはこうした地域の工業遺産を保存し、未来につなげようとする住民運動に発している。1972年この二つの町の都市共同体(Communauté Urbaine Le Creusot Montceau-les-Mines、以下 CUCM)に自治区域を持たせるという趣旨のもとエコミュゼが設立されたもので、施設が対等にネットワークする協約体型の運営方法をとっている典型的施設である。

区域一帯の土地は住民のための文化開発事業地区としての特徴をもち、エコミュゼ協会は住民が積極的に参加できるようにするにはどうすべきかを研究し、地方の資産とも言うべき場所、とりわけ産業上の資産といえる場所での活動を支援してきた。

当エコミュゼが所有またはリンクする施設には次のようなものがある。

- ・人と産業の博物館 (図10)
- ・運河博物館と運河の遊覧航行
- ・セラミック工場
- ・鉱山博物館
- ・化石の博物館

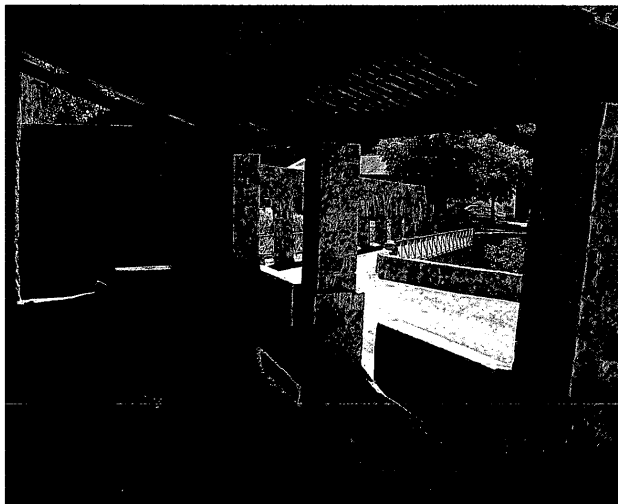


図7 粉挽き工場へ引かれた水道



図9 クルーゾの町の入り口を飾るドロップハンマー

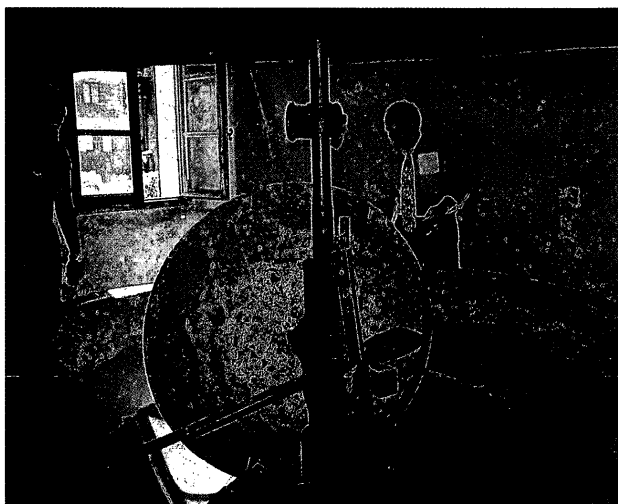


図8 オリーブ油絞り工場



図10 人と産業の博物館

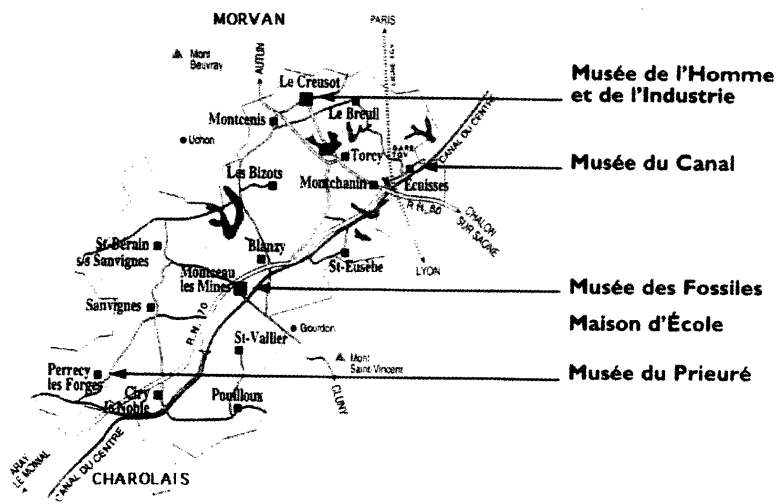


図11 クルーゾ・モンソー・エコミュゼのテリトリー

- ・学校の家 (メゾン・デコール)
- ・小修道院長の博物館

以上のほかに観覧施設ではないが、旧炭鉱労働者の集合住宅などを保有・維持管理している。

## (2) 各地の調査記録

### ●クルーズ市内をバスと徒歩でぎっとまわる (ベルナル・クレマン氏の案内)

巨大なドロップハンマーを町の入り口に置くことで、この町が鉄の町であることを象徴している。(図9) TGVの車両などもこの町で作られた。

エコミュゼが歴史的建物と認定したのでこわせなくなった車両工場を、図書館としてリニューアル中の現場を視察。これは大学図書館として使用が予定されている。工法として注目されるのは、いつでも元の車両工場に復元できるよう、構造は躯体とは別に内部に組み上げていることである。

●旧労働者住宅 最盛期時代の炭鉱労働者の住宅である。現在はエコミュゼが取得しており、原形はそのままに、内装はリニューアルして一般に貸家として解放されている。(図13)

●人間と産業の博物館 (Musée de l'Homme et de l'Industrie) に入り館内を回る。

この博物館自体が歴史的な遺物であり、19世紀の模型が展示されている。病院、学校、チャペル、給水塔があったことがわかる。最初はナポレオン時代でマリーアントワネットのクリスタルガラス製造工場だった。50年間続いたがフランスでは唯一のクリスタルガラス工場だった。ロートを伏せたような特異な形をした二つの建物はガラス工場時代はガラスを溶かす炉であった。1836年にシュナイダー家に他の施設とともに買い取られ、給水塔とチャペルになったが、このうちチャペルは20世紀初頭(1910)に劇場として改装され今日に至っている。インテリアは18世紀のマリーアントワネット時代にしたてである。1916年に撮影されたパノラマ写真が展示されているが、当時はクルーズの最盛期であり、30,000人の人口のうち15,000人が鉄の工場で働いていた。

この館では恒常展と臨時展の両方を行っている。

現在はアメリカの産業遺産に関する臨時展を開催している。臨時展があると産業だけにとられない展示ができてよいとクレマン氏は考えている。

絵画は絵画で普通はまとめて展示するのだろうが、ここではバラバラに展示している。展示スペースの問題もあるが、むしろテーマに沿った展示を心がけているからで、子供たちにとってはわかりやすいのではないかとのことであった。つまり技術的のほか、社会学的や哲学的見方などいろんな見方があるということをエコミュゼでは重視しているのである。

クレマン氏は人と産業の恒常展をやりたい、と考えている。たとえば、食卓のサービスの仕方は時代とともに代わってきている。かつて室内は薄暗かったのでクリスタルガラスの光で食卓回りを明るくする必要があったのだ。人の生活と産業は密接に関係している。イギリスのW・モリスのデザインに似た壁紙は当時のままのものだが、部屋によっては昔のままにしてある。

このように、このミュゼでは機械ばかりでなく絵画やクリスタルガラスといった身近なもので、一般の人々の興味を引くように考えている。

### ●中央運河および運河博物館 (Musée du Canal)

運河は18世紀当時とは若干形を変えてはいるものの大西洋と地中海の運行を可能にしている。発掘された18世紀の水門の一部と陸に上がった客船がそのまま博物館になっている。(図16~19)

### ●27日(土) 人間と産業の博物館にて

館長ノッテジュウム氏のレクチュア (図14)

エコミュゼの全国組織がある。連合会である。昔は一つのエコミュゼしかなかったが、クラシックなミュゼ以外はすべてエコミュゼとしたため数が増えた。最近ではテーマ制になってきたが残念なことである。ヨーロッパには様々なものがあり、ここと似たような状況を抱えたエコミュゼも10ほどある。

ブルーのパスポート(テリトリー内の全ての施設に入れる入場券のようなもの)は今年のもの、エコミュゼと書いてない。これは、炭鉱のミュゼが都合の良いところだけエコミュゼを利用するので外した

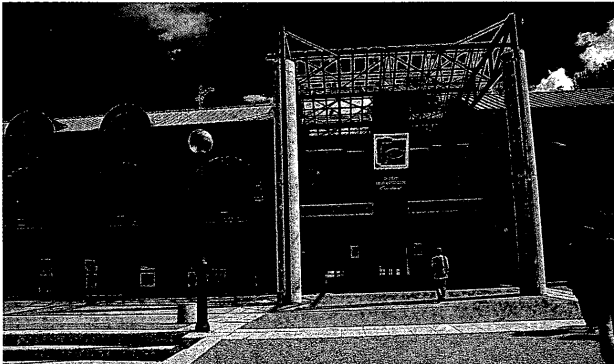


図12 元車輻工場の図書館

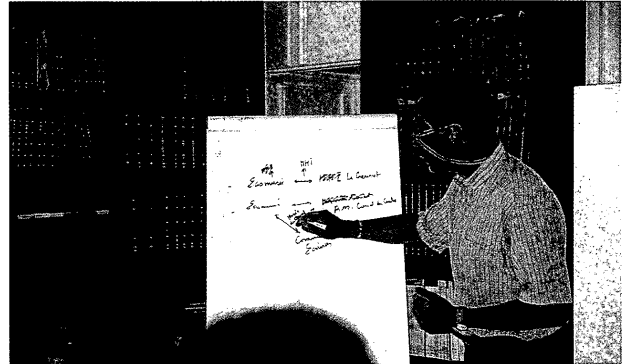


図14 ノッテジウム館長のレクチュア風景



図13 旧労働者住宅



図15 廃セラミック工場

ためである。炭鉱のミュージゼは20年前からあるが、当時働いていた人々によるボランティアメンバーが案内役をしている。年間25,000~30,000人のビジターがあり黒字になったが、20歳年をとったためつらくなり、何か良いアイデアがないかといっている状態である。

こちら（エコミュージゼ）では必要な専門的なことに対しては、たとえば人類学の専門家を呼んだりということで協力している。当館ではとても大きな産業遺産（コミュニン、県、国の手に負えないような）をテーマにした会合を行う予定がある。次の会合も欧州規模（欧州10カ国）で雇用政策、失業対策などを話し合う予定である。10月にはセラミックの会議もあるので参考にしようと考えている。

エコミュージゼは若い人の雇用に関しては効果を発揮できなかった。教育的には学校が利用するなどで一定の成果を上げたといえる。現在二人の現職の教師が研修に来ている。

当エコミュージゼの理事会には各アソシアションから

代表（各2名）を出しているし、日常的にアドバイスを与えている。

エコミュージゼ会員の会費の集め方は自由である。この場合、一般会員と名誉会員があり、後者はかつて会の活動で活躍してくれた人などで、行事などへの無料参加と印刷物の配布の特典がある。

エコミュージゼの会費は収入から控除される。しかし会員数その他厳しい規制があるのでこちらではその制度は利用していない。

会費は100Fだったか150Fだったかよく知らないが、今年会員100人増のキャンペーンをはることになっている。ただ、会員が増えてもボランティアのすることは少ない。専門家がいるからである。ここ人間と産業の博物館にはアソシアションはない。

クルーズの町とこのミュージゼの間には協約があるが、通常各ミュージアムとエコミュージゼおよびコミュニンの三者の関係から成り立っており、全体がエコミュージゼであるともいえる。

これは各アソシアションが勝手に出て行かない

よとの配慮からで、たとえばコミュニオンからは議員などが出ている。エコミュゼはこのように人間関係が基本なので、時に孤立して離脱ということもありうる。しかしなるべく離脱しないほうが全体の整合性が出てよいと考えている。要はフランスの中央政府のやり方を押し付けるのではなく、なるべく各エコミュゼで自由に特色をもたせるべきだと私は考えている。

国でも企業でもできないことをやれるのがアソシアションである。アソシアションには必ず予算がつく訳ではないが、いろんなどころ（省庁等）から予算がつけられるようになっている。

文化省は地方の首長の右派左派には関係なく、前の政権のときはエコミュゼより従来型のミュージアムに予算をつけたが、その前の社会党政権はエコミュゼに好意的だった。今度の連合政権ではどうなるか。社会党が入っているので期待している。

エコミュゼは20年でずいぶん変わった。現在では非常に大きなアソシアションもあるが、もともとは住民のためのものだった。

この町は観光の対象ではなかったが、ブルゴーニュの観光の一端にのるようになってきた。かつて観光客はこの町を避けて通っていた。いまは地中海へまっすぐ向かう客にも立ち寄ってもらいたいと考えられるようになった。地域のレストランなどに金が落ちるといふ経済効果もあることによりやく気がつき始めたのだ。

産業遺産経済局には13のプロジェクトがあり、昨日大きな変化の一つに数えられる会議があったばかりだ。議員の前で各コンサル会社が計画を発表したが、私・館長の言っていることと同じでも第三者が言うことによってより効果があったと考えている。

一方、政治家のカルチャーに対する考え方も変わった。収入源にもなるということがわかってきたからだ。とはいえ、入場者を増やすためだけにネジ曲げた展示をしてはいけない。経済に引っぱられてはいけない。ツーリズムへの役割や対策などまで全てエコミュゼがするわけではないが、何らかの役割を

果たすことは重要である。

今後バーチャルが発達するだろうが逆に本物を見せる必要性も高まっている。

シル・リ・ノーブル（セラミック工場）の例が示すように職のない人々に職業訓練させるなどしている。また18歳から20歳の比較的軽い罪を犯した人達を対象に教育を行い、古い建物を発見させたりしている。刑の代わりに100時間～200時間働いてもらうシステムになっている。

ある風車小屋が売りに出され、エコミュゼで買わないかと話が持ち込まれた、理事長と専門家が協議したがこちらでは風車はあまり合わないということで、補助金申請の手伝いはしたが、エコミュゼのプロジェクトに引き入れることはやめになった。これは結局あるオランダ人が、ピジターに見せたいということで買った。

アソシアションと個人とエコミュゼの三者の関係の新たなシチュエーションが生れてきている。持ち主が個人の場合は世に出にくくなる。

シル・リ・ノーブルの場合、価値ある古い機械があるというので見に行ったが、持ち主が、まだ使えるということでなかなか譲らなかった。持ち主が亡くなり、息子さんのものになって快く譲ってもらえることになった。

若い人達の職業教育の話も出てきて、職業教育局の人の意見も聞いて、ならば建物もということになった。地元はこれまで関係なかったが、今は住民は興味をもっている。

文化省は国立のミュージアムにしか予算を出さない。しかし展示会などにはエコミュゼであろうとなかろうと補助金を出しているので、補助金額が全体の何パーセントかはわからない。この場合地方文化局と関係があるので、比較的予算が出やすくなっている。1970年代にエコミュゼの活動が始まった時、文化省の中に試験的な予算枠があった。最近の選挙で政府も代わったので、新たな案に対する予算がつくかな、と期待をもって静観しているところである。ちなみに社会党は総予算の1パーセントにまで上げようとしている。



・ネットミュージアムについて

コンピュータを使ったサービスの一つといえる。アソシアシオンによって管理運営されており私(ノッテジウム氏)が会長を務めている。情報(コンテンツ)は常に新しく書き換えている。毎日3,000から5,000ものアクセスがある。年間400万フランを投資しているが、私企業にとっては勉強になっている。

国が認めたエコミューゼには税制などメリットがあるが、手続きが面倒であり、改善の余地がある。

●メゾン・デコール La Maison d'école

もと教師で、現在このミューゼでボランティア活動をしている Mrs Gisele Bouttet 女史が待ち構えていて案内してくれる。

・1975年にピエンナーレ展があり「19世紀の学校を再現しよう」という展示を行ったが、そのときの展示品をここに移したのである。

1881年に男子だけの公立学校として初めてオープンした学校で、建物自体が歴史的建築物である。それまでは炭鉱が経営する学校しかなかった。

1階のエントランスホールにはさまざまな絵や写真が壁にかけられていたが、それらは、かつて貧しい子供たちは教育を受けることができなかったことを示す絵画や、当時の工場の写真などであり、各時代の世相の変遷を示している。

当時は地方ごとに言葉が異なっていたのでパリ地方の言葉を標準として教えた。ナポレオンの時代から子供たちに読ませるべき本と読ませてはいけない本がリストアップされていた。兎の耳のような長い耳つき帽子は一種のお仕置きとして成績の悪い子にかぶせたものである。また家で不幸があった子は黒のブラウスを1年間着ていたというが、このあたりは依然として教会の影響を感じさせる。

・一つの部屋は1880~90までの教室を再現してある。1789年人権法ができた。教室の棚に石膏像が置かれていたマリアヌは第3共和制の象徴である。(筆者注:初等教育の無償化、義務化、世俗化が実施され、それまでの教会の影響を排して、国家による教育がようやく安定に向かった時期と考えられ



図16 中央運河

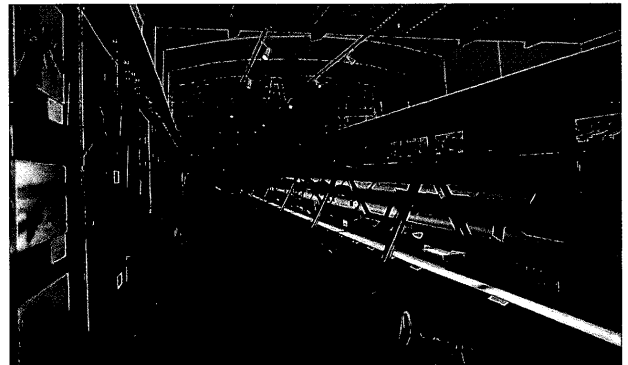


図18 運河博物館内部

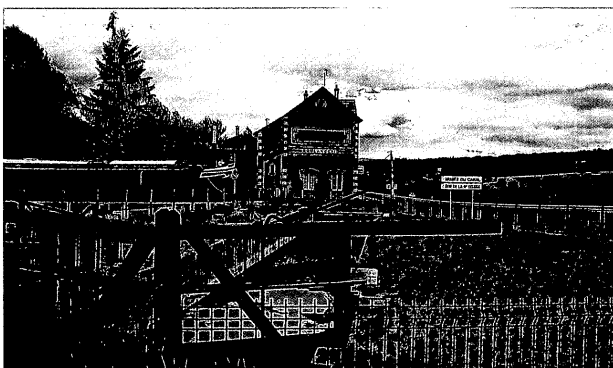


図17 旧運河と運河博物館



図19 開門に入って水位の上昇を待つ

る) 当時、普仏戦争(1870~71)で取られた領土を取り返すため、12歳の子供にまで鉄砲の持ち方を教えていた。

そろばんを直角に曲げたような教具は5歳の子供に数を教える道具であり、女教師が発明したものである。ちなみにフランスでメートル法が施行されたのは1919年のことであり、同年完全実施された。

照明はガス灯のランプが使われたがこれは石炭のおかげである。1908年には電気が通った。

1950~60年代は学校の分岐点だった。さまざまな教材が登場し、斜めの机の上では置けなくなったのである。4~14歳までの子供が学校に通っていたが、1936年以降、14歳を過ぎた子供40人中5人が高校へいくようになった。なお、1933年のころまでは、書き取り(ディクテーション)、算数、ペンによるレタリングが教育の中心だった。

壁にはウイスキーを飲んでアルコール中毒症になった顔と、ワインを飲んで元気はつらつな顔をしたポスターが貼ってあり、いささか政治的な意図を感じ

させる。30度~60度ではない細長い変形の三角定規があったが、これは単に直角と直線だけを教えるものであった。

この施設の修復と活用に関する技術的・学問的サジェッションはエコミュゼが行っている。資料も多数残っているが、これらはすべてエコミュゼが保管している。

・1978年からここメゾン・デコールのアソシエーションがスタートした。現在、年間約1000人が訪れている。

アソシエーションの会員は30~60人で、17人の活動メンバーがいることになっているのだが、実際には3人でやっている。活動しない会員はあまり欲しくない。

毎日曜の午後(15:00~18:00)開館しており、5人のボランティアで対応している。シーズン(6月1日~9月15日)は火曜日から日曜日まで毎日ボランティアが派遣されてくる。(火曜日から金曜日までは15:00~18:00、土日は14:00~18:00)



図20 メンデコール建物

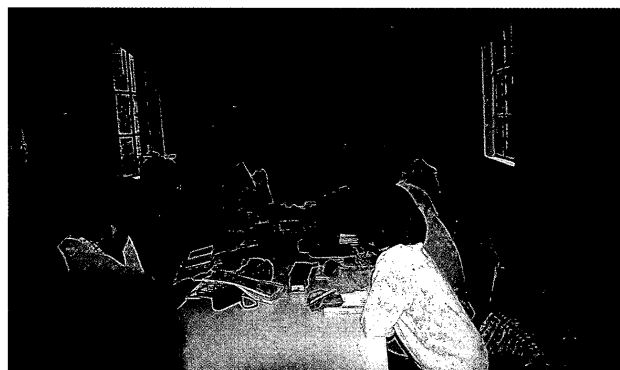


図22 セラミック工場 レクチュア風景

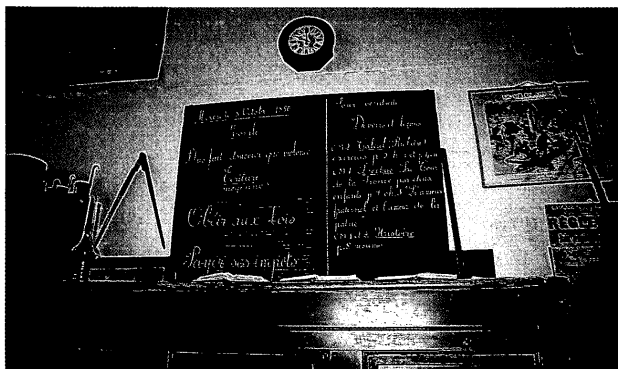


図21 メゾンデコール教室

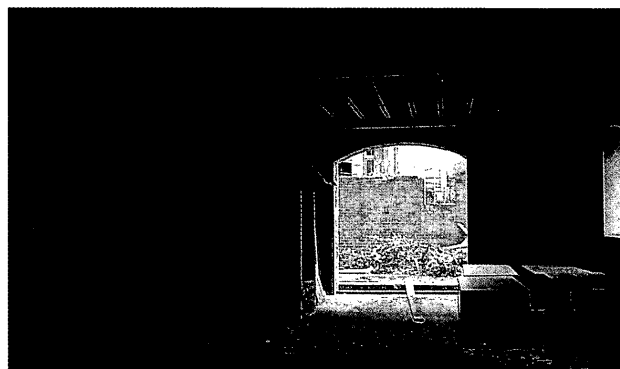


図23 リニューアル中のセラミック工場内部

創立者は元教師であり、館長の先生であった人物である。ここの施設を使って子供たちの教育が行われており、研修員として現職の学校の先生も来て活動している。

案内役の女史は、CDロムを作って19世紀の教育を人々に知らせることが夢、と話していた。

問題点として、若い人達があまり興味を示さなくなっていることがある。活動をどのようにして引き継いで行くか、活性化させるかが問われている。

●6月27日（金）セラミック工場にて

Thierry Bonnot 氏の案内とレクチュア

朝宿舎を出て専用バスにのり10時20分頃到着。

・操業当時、工場の裏手から粘土を掘上げトロッコで運びこんでいた。線路の幅は構内は40センチで外部は60センチである。

原料は工場の最上部へ上げ順次加工しながら降ろすという方式だった。したがって、上には粉碎機があるがまだ上には上がれない。(未修理のため)

・機関車の車庫だった建物に入りミーティング。

瓦の製造機械はレストアしやすかった。動力は蒸気機関で摩擦プレスその他の機械を動かした。当時は鉄道の線路幅があわないのでトラックに乗せて運び出していた。

復元中の工場屋根は、ランベールという運河沿いの工場で、昔と同じ形に焼いた瓦で葺いているところである。1967年に廃工場となったが、80年代に保存の話が起り、1994年にエコミュゼに譲ることが決まり1995年に買収が成立した。

傾いているのは1893年の煙突であり、当初のものである。

1920年代には17の炉があり、炉にいれて焼く際、専用のトロッコに積み替えていた。

当時、全行程に35日間必要だった。焼成には120時間要した。現在のランベールでは35~40㎡の炉で15,000個が一度にやけ、4日間できる。

1920年ころに既に使われなくなった円形の炉がある。炉の余熱を利用して乾燥させるしかけで、上に半製品を上げていた。

最盛期、完成品の輸送はシャニムランという駅に

接続しリヨンへと送られた。

工場の修復費として100万フランずつ10年間の予算がついている。その内訳は EUの職業教育費、失業者救済費、ARPA<sup>注3</sup>、FEDER<sup>注4</sup>、DRAC<sup>注5</sup>、クルーズ・モンソー都市共同体、町、ランベール社、が各分担している。

・ベール・ボード社 (Vaire=Baudot/ももとの会社名) について。

1863年に創業。現在地とは300メートル程はなれた別の場所にあった。1893年にここで工場を設立。炉は4つあった。1937年に娘むこのPiot氏が後を継いだ。1967年からは操業しなくなり打ち捨てられていた。

現在ミーティングしているこの場所は研修生の食堂になっているが、本館が完成すれば床を剥がして元の機関車の車庫として線路に戻す予定である。

活用方法としては、セラミックのアトリエとか職人養成の学校とかが考えられている。昔のようなこの地方の伝統的な棟飾りなどを作ったら良いのではないかと考えている。

自分としては名称としてミュージアムは使いたくないと考えている。

7~8月の土日は来訪者が増えそうなので3人でガイド役を務める予定である。5月に25人のグループが結成されたがまだアソシエーションにはなっていない。

自分はエコミュゼの職員であり、給料はエコミュゼから出ている。

### 3.まとめ

「人と産業の博物館」館長ノッテジュウム氏によればエコミュゼは「非マテリアル化されたコンセプトである。つまりテリトリー内にある歴史的遺産とそれに付随する活動・サービス・考えを含めた概念である。」ということだ。以前、この博物館の前にエコミュゼという看板をたてたら、訪問者はこの館だけを見て帰ってしまうことがあったという。同氏の「エコミュゼが完成したらもうエコミュゼは要らない」、という一見極論に思える言葉も、エコミュ

ぜの趣旨・コンセプトを、住民はもちろん行政や産業界も十分理解してくれるようになった時、と解釈すれば納得できるのである。

以下各地のエコミュゼを視察した結果の考察を各地ごとにまとめた。

### 3-1 ルードル・エコミュゼ

美しい自然が残っているということはそれだけで財産である。皮肉にも鉱山が閉山になって寂れ、人口が激減した代わりに自然は美しさを保つことが出来たともいえる。この地域の北および東はスイスの国境を形成するアルプス地帯であり、尾根歩きを楽しんだり、溪谷渡りを楽しむ登山者やハイカーにとってこの上ないフィールドを提供している。日本にも輸出されているミネラルウォーターの「バルベル」はこのエコミュゼの北方に隣接していることが示すように、谷には美しい水が豊富に流れている。筆者の調査の折もこの谷川沿いに蛍の群れを見ることができたが、それほど手付かずの自然が残っているのである。

小さな村々は、今のままで何もしなくても十分美しいが、それだけに外部からどんどん人が入ってくるようになった時、どのように対処しなければならないかの方が問題であると思われる。

石造建築だけに日本ほど保存の問題で悩むことはあるまいが、土砂崩れに関しては地球温暖化のせいもあり、今後は警戒せねばなるまい。しかし、すでにさまざまな砂防の実験が行われていたことは、敬服に値する。

また、教会などの修造に携わる伝統的な大工職人の集団が住み着いていて、エコミュゼの建具の製作などで協力していること、および、工芸家などにアトリエを提供し、積極的に住人を呼び込もうとしている点が特筆される。人口がわずかながら回復しつつあるというのはエコミュゼが一定の成功を収めつつあることの証と見てよいのではあるまいか。

### 3-2 クルーゾ・モンソー・エコミュゼ

このエコミュゼはフランス産業史にとって重要な

地域であり、さまざまな産業遺産を有するが、視察した数ヶ所の施設のうち、特に印象に残った施設についての感想を述べ、まとめとしたい。

なお、ここの特徴である協約体型は一見民主的で良さそうに感じるが、実際には各々異なった事情を抱えており、困難な問題も多いように見受けた。

・メゾン・デコール アルザスのエコミュゼにも「最後の授業」(敗戦のため)を再現した教室があつて感動させられたが、ここでも筆者は強い感銘を受けた。教育は百年の大計と言うが、政治、社会、人間、文化、産業等々すべてが教育には反映しており、全てに影響を与えるのもまた教育であるとの感慨をあらためて抱いた。特に1950年代の教室では、同じころ日本で初等教育を受けた筆者の記憶に連なるものが多く、感慨深かった。

案内役の女史が貸してくれたペンをインク壺に浸けてレタリングを試みたが、遠い昔の記憶とともに、ワープロは勿論、鉛筆や、ボールペンや万年筆にはないその書き味の魅力を発見し、その体験だけでも一遍の論文が書けそうに思えた。

教育に携わる者にとって、こうした施設で一定期間研修を行い、教育とは何かについて思索を深めることが、今必要なのではあるまいか。

#### 注 記

- (1) アソシアシオン  
フランス独自の「アソシアシオンの契約に関する1901年7月1日法」で規定されており「二人以上の複数人が、非営利的な目的をもって、知識や活動を永続的に共有する協約体」である。多くのエコミュゼはこのアソシアシオンを母体としている。
- (2) コミューン  
これもフランス独自の地方自治制度で、県と市町村の中間に位置する行政単位。
- (3) ARPA  
Advanced Reserch Projects Agency  
高等研究計画局
- (3) FEDER  
Fonds Européan de Développement Régional  
ヨーロッパ地域開発基金
- (4) DRAC  
Directions Régionales d'action Culturell  
文化活動地方管理局

(平成9年11月7日受理)